

アカズ人名録 -- ハビャリマナ体制とルワンダの虐殺に関する資料

著者	武内 進一
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア経済
巻	48
号	9
ページ	51-57
発行年	2007-09
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00007322

アカズ人名録

——ハビヤリマナ体制とルワンダの虐殺に関する資料——

たけ うち しん いち
武 内 進 一

はじめに

本稿で紹介するのは、アカズ (*akazu*) と呼ばれる人々のプロフィールである。ルワンダ語で「小さな家」を意味するこの言葉は、ハビヤリマナ (Habyarimana Juvénal) 政権 (1973~94年) において国家権力中枢に位置した人々を指す隠語である。国家権力中枢がこのような隠語で呼ばれる理由は、それが制度的に確立した機構ではなく、特定の人的ネットワークのなかに存在したことによる。独立後のアフリカ諸国において、国家権力の主たる基盤が公的な制度というよりもインフォーマルな人的ネットワークに置かれてきたことはこれまでもしばしば指摘されてきたが^(注1)、ハビヤリマナ政権のルワンダも例外ではないといえよう。したがって、アカズのメンバーの来歴を知ることは、ハビヤリマナ政権の性格を捉える上で不可欠の作業である。

さらに、アカズに関する情報は、ルワンダのジェノサイドを理解するためにも欠かせない。1994年4月6日夜のハビヤリマナの暗殺を直接的な契機として、わずか100日足らずの間に50~80万人が虐殺されたルワンダのジェノサイドについては、既に多くの研究が蓄積されてきた。そこでコンセンサスとなっているのは、政治エリートの役割の重要性である。ルワンダの虐殺

は、部族間の報復合戦ではない。国家権力中枢を掌握したフトゥ政治エリートの主導によってジェノサイドが遂行されたことについては、研究者の間に見解の一致がある。したがって、ルワンダのジェノサイドがなぜ、どのように起こったのかを検討する上で、ハビヤリマナ政権中枢を占めた人物に関する情報は必要不可欠である^(注2)。

本稿は、こうした問題意識を念頭に置きつつ、アカズを構成する主要なメンバーのプロフィールを整理した資料である。アカズについては先行研究でもしばしば言及されているが、そのメンバーの構成や来歴に関する情報は十分に整理されていない。本稿は二次資料に依拠しており、メンバーによっては十分な情報が存在しないという限界があるものの、アカズの性格を理解するうえで一定の意義を有するであろう。

上記の2つの問題意識との関連で注意する必要があるのは、アカズはハビヤリマナ政権の核だが、ジェノサイドを推進した政治エリートのなかでは一部にすぎないことである。ジェノサイド遂行のプロセスについて詳細は武内 (2007) を参照いただきたいが、大まかにいえば、それを主導した政治エリートのなかに3つの集団を区別することができる。第1にアカズ、第2に、アカズ以外のMRND^(注3)内急進派勢力、第3に野党急進派勢力である。ルワンダのジェノサイ

ドが恐るべき規模で遂行されたのは、これら複数の急進派勢力が糾合し、それによって多くの民間人の動員が可能になったからである。この意味で、アカズはジェノサイドを主導した勢力の一部にすぎない。本稿では、急進派政治エリート全体について人名録を作成することは紙幅の関係上断念し、アカズに絞って資料を作成した。

アカズに関して議論する場合、まずもって問題になるのはその範囲である。アカズは、メンバーシップが固定した集団ではない。アカズとは他称であり、インフォーマルな人的つながりであって、制度的に固定化されたメンバーが存在したわけではないからである。実態としてそれは、ハビヤリマナとその妻アガト (Kazinga

Agathe) の兄弟 (ジギラニラゾ, サガトゥワ, ルワブクンバ) を中核として個人的な関係で結びついた有力者のネットワークであった。本稿では、表1に示すように、5つの先行研究でアカズのメンバーとして言及されている人物 (計17名) を選び、それにハビヤリマナ大統領を加えた18名の人名録を作成した。

本資料から、アカズの主要なメンバーとして名指しされている人物のバックグラウンドとして、幾つかの要素が混在していることがわかる。第1に、血縁的な要素である。大統領の親族がアカズの中核を構成するが、なかでも妻アガトの兄弟 (すなわち、ハビヤリマナにとっては義兄弟) が重要である。先行研究においても、これら義兄弟をアカズの中核とみる点では一致して

表1 アカズの範囲

先行研究	Guichaoua (1995, 768)	Prunier (1995)	Chretien (1995)	Melvorn (2004)	Munyarugerero (2003)
Zigiranyirazo Protais	○	○	○	○	○
Sagatwa Elie	○	○	○	○	○
Rwabukumba Séraphin	○	○	○	○	○
Serubuga Laurent	○	○			
Bararengana Séraphin	○				○
Nzabagerageza Charles	○				
Ntirivamunda Alphonse	○			○	
Nzirorera Joséph	○	△	○		
Mbonabaryi Noël	○	○	○		
Rwagafilita Pierre-Célestin		○		○	
Bagosora Théoneste		△	○		
Bizimungu Casimir		△			
Musabe Pasteur			○	○	
Kabuga Félicien			○		
Nkundiye Léonard				○	
Nsengiyumva Anatole				○	
Simbikangwa Pascal				○	

(出所) 上記先行研究に基づき、筆者作成。

(注) ○は先行研究においてアカズのメンバーとして名前が挙げられた人物。△は曖昧な例として名前が挙げられた人物。

いる。アガトの兄弟が政権中枢で重要な位置を占めた理由のひとつは、歴史的、文化的なものである。ハビヤリマナと妻アガトの出身地である北西部においては、植民地化以前には中央王宮の支配権が及ばず、フトゥのリネッジ（血縁集団）が自律的な政治共同体を形成していた。そこでは、ウブコンデ（*ubukonde*、複数形は*abakonde*）とよばれる先占リネッジが土地に対する権利を保有し、後からやってきたリネッジ（*ubugererwa*、複数形は*abagererwa*）との間にパトロン・クライアント関係を結んで土地を分配する慣行があった。ハビヤリマナの出身リネッジがクライアントの立場であったのに対して、アガトのリネッジはウブコンデで、その出身者にはもともと有力者が多かった [Reyntjens 1985]。

第2に、軍におけるつながりである。ハビヤリマナはルワンダ国軍創設時のトップエリートであった。独立直後のカイバンダ（*Kayibanda Grégoire*）政権下で国防相を務め、軍トップの立場でクーデタを起こし、政権を掌握した。アカズには、軍においてハビヤリマナと親密な関係を構築してきた軍人がかなりの数含まれている。

第3に、地縁的な要素である。アカズのメンバーは大統領夫妻の親族だけに限られず、ギセニイ州のカラゴ（*Karago*）およびギチエ（*Giciye*）の出身者がアカズの中核をなすとの見解もある [Guichaoua 1995, 768]。虐殺の首謀者といわれるバゴソラなどは、ハビヤリマナ夫妻との直接的血縁関係は指摘されておらず、この地縁グループに属するといえよう。地縁グループとなると、その範囲は相当曖昧になる。表に示した人物以外にも、例えばニゼイマナ（*Nizeyimana*

Ildephonse）はルワンダ国際刑事裁判所（*International Criminal Tribunal for Rwanda: ICTR*）の告訴状でアカズだとされているが、ギセニイ州出身という以上にどの程度の血縁的、地縁的關係があるのかは不明である。

本資料の作成にあたっては、*African Rights*（以下ARと略記）や*Human Rights Watch*（以下HRWと略記）など人権NGOの報告書や、ICTRの起訴状や判決文などを参考とし、適宜研究書の記述に依拠した。ICTRの資料から得た情報については末尾に [ICTR] と記し、二次資料についてもなるべく出典を記した。何も書いていない場合は、AR (1995) かHRW (1999) から引用したものである。この2つの資料には索引が付いており、原典に当たることは容易である。今後、ICTRの公判が進めば、アカズのメンバーに関する情報も大幅に増えるであろう。その意味で本資料は、暫定的な性格のものである。

人名録

Bagosora Théoneste (Colonel)

1941年8月16日ギチエ（*Giciye*）コミューン（ギセニイ州）で生まれる。7人の子供がいる。1964年、キガリの士官学校（*Ecole des officiers*）を卒業し、少尉（*Second lieutenant*）となる。後に、フランス戦争学校で上級軍事教練修了証書を取得。その後、キガリの軍事上級学校のナンバー2に任命され、さらにカノンベ軍事キャンプの司令官に任命された。1992年6月、国防省の官房長に任命される。1993年9月23日に軍から退役したが、国防省官房長の職には1994年7月に国外に脱出するまで留まった [ICTR]。1994年4月6日には国防大臣のビジ

マナ (A. Bizimana) がカメルーン出張中で、その間に彼が差配した。4月7日に国防省から出された戒厳令は、彼の指示によるという [Melvern 2004, 137ほか]。虐殺の計画、遂行の中心人物と目されている。

Bararengana Séraphin (Dr.)

ハビヤリマナ大統領の兄弟。内科医。ブタレ近郊のブイエ (Buye) に住んでおり、大統領警護隊が警備を担当していた。1994年4月6日以降は、トゥンバ (Tumba) 地区の自宅に大統領警護隊が駐留 [HRW 1999, 435]、4月7日午後、ガチンジ (M. Gatsinzi) やシンディクワボ (T. Sindikubwabo) らとともに車列を組んでブタレからキガリへ到着 [Melvern 2004, 160]。

Bizimungu Casimir (Dr.)

1951年、ルヘンゲリ州ニヤムガリ (Nyamugari) コミューン生まれ。1994年4月9日から7月半ばまで、暫定政権の保健相を務める。医師で、ブタレ大学病院の公共衛生部長を務めた。1989年1月15日、90年7月9日発足のMRND内閣、および91年2月4日に発足した最初の複数政党内閣で外相を務め、さらに87年1月5日発足の内閣、92年4月16日発足の第2次複数政党内閣、93年7月18日発足の第3次複数政党内閣、94年4月発足の暫定内閣では保健相だった。MRNDの中央委員 [ICTR]。ジェノサイドのイデオロギー面の指導者といわれる [Prunier 1995, 239]。

Habyarimana Juvénal

1937年、ギセニ州ランブラ (Rambura) 生まれ。ロバニウム大学 (コンゴ) の大学入学準備プログラム (1年間) に通った後、キガリの

士官候補生学校に入学。優秀な成績で卒業。卒業と同時に、ベルギー士官の補佐となる。1963年、国民防衛軍 (National Guard) のトップとなり、64年1月には大尉 (Major) に昇進。1965年には国防警察省 (Ministry of National Guard and Police) の大臣となり、1973年7月5日に無血クーデタで政権を掌握した。1975年7月にMRNDを自ら設立し、1978年憲法でそれを唯一の政党と定める [Dorsey 1994]。1991年に複数政党制を導入。1994年4月6日、搭乗機が撃墜され、死亡。

Kabuga Félicien

1935年、ビュンバ州ムカラング (Mukarange) コミューン、ムニガ (Muniga) セクター生まれ。実業家。息子がハビヤリマナ大統領の娘と結婚した。国家防衛基金暫定委員会 (Comité provisoire des fonds de défense nationale) 委員長で、急進派メディアである「ミルコリンヌ自由ラジオ・テレビ」(RTL) の執行理事会 (Comité d'initiative) 理事長。MRNDやフトゥ至上主義政党のCDR (Coalition pour la Défense de la République) およびそれぞれの民兵グループ (インテラハムウエ、インプサムガンビ) に対する主たる資金供給源として多大な影響を有していた [ICTR]。

Mbonabaryi Noël

大統領のおじて後ろ盾。国会議員。1994年初めに死去 [Chrétien 1995]。

Musabe Pasteur

全国レベルにおける民兵の組織者 [Prunier 1995, 239]、[「アフリカ大陸銀行」(Banque Conti-

mentale Africaine: BCA) の頭取。バゴソラの兄弟 [Melvern 2004, 34]。

Nkundiye Léonard (Lieutenant-Colonel)

1994年以前に大統領警護隊司令官を務めた。

Nsengiyumva Anatole (Lieutenant-Colonel)

1950年9月4日、ギセニ州サティンシ (Satinzi) コミューン生まれ。1993年6月13日、ギセニ州軍事作戦司令官に就任。それ以前、数年にわたり、国軍最高司令部において軍事諜報部門チーフの職務にあった [ICTR]。ニュンド (Nyundo) 教会の虐殺を含め、ギセニの虐殺実行に重要な役割。憲兵隊への影響力も大きかった。

Ntirivamunda Alphonse

ハビヤリマナ大統領の義理の息子 (甥という説もある)。前公共事業省道路建設局長。1993年2月21日にキガリで起きたガタバジ (Félicien Gatabazi) 暗殺事件に関与 [Reyntjens 1995, 61; Melvern 2004, 28]。

Nzabagerageza Charles (Dr.)

ハビヤリマナ大統領の従兄弟。前ルヘンゲリ知事。知事時代にバゴグウェ (Bagogwe) の虐殺^(注4)に関与 [AR 1995, 163]。

Nzirorera Joséph

1950年、ルヘンゲリ州ムキンゴ (Mukingo) コミューン生まれ。1994年当時、MRNDの全国事務局長 (National-Secretary) かつ中央委員で、93年以来その職にあった。下院議員でもあり、MRNDのルヘンゲリ代表だった。1994年

4月8日の暫定政権期には、下院議長を務めた。それ以前、1989年1月15日のMRND内閣では公共労働相、90年7月9日と91年2月4日のMRND内閣では鉱工業・中小企業相を務めた。1991年以前からMRNDの党中央委員だった。アカズ [ICTR]。1973年のクーデタ以来、ハビヤリマナに仕える。RTLM株主。

Rwabukumba Séraphin

ハビヤリマナ大統領夫人の兄弟。中央銀行総裁を務め、輸出入業にも関わる。

Rwagafilita Pierre-Célestin (Colonel)

軍人。大統領搭乗機撃墜事件後、バゴソラとともに「公衆救済委員会」(Comité de Salut Public) を設置し、暫定政府樹立に向けて動く。ハビヤリマナ大統領夫人の兄弟 [Prunier 1995, 230]。軍人だが、1992年4月の複数政党制内閣発足後退役 [Melvern 2004, 32-33]。キブンゴの自警団 (civil defense) を統括。

Sagatwa Elie (Colonel)

ハビヤリマナ大統領の妻の兄弟 (従兄弟との説も)。ハビヤリマナ大統領の個人秘書。飛行機撃墜により大統領とともに死亡。1991年1月22日、RPFがルヘンゲリの刑務所を攻撃した際、部隊司令官のウイホレイエ (C. Uwihoreye) 大尉に囚人を全員殺害するよう大統領指令として命令した [Melvern 2004, 16]。大統領警護隊の実質的な最高司令官。正式な大統領警護隊司令官であるンピラニヤ (P. Mpiranya) よりも権力が強かった [Reyntjens 1995, 57]。

Serubuga Laurent (Colonel)

前国軍参謀次長。1973年にハビヤリマナのクーデタを助ける。ンセンギユンヴァ (A. Nsengiyumva) 大佐とともに、ギセニイ州で自警団(civil defense)を統括。1988年、大統領に近かったマユヤ (S. Mayuya) 大佐の暗殺を組織 [Prunier 1995, 87]。1992年4月の複数政党制内閣発足にともなって退役 [Melvern 2004, 33]。

Simbikangwa Pascal (Captain)

大統領府勤務。サガトゥワ (Sagatwa) の姻族。1994年4月には公的な役職に就いていなかったが、影響力は強大だった。RTLМの設立、運営に重要な役割を果たし、民兵組織化にも努める。車椅子を利用する身体障害者だったが、中央情報局などに連行される犯罪者に拷問を加えるのを好んだため「拷問人」と呼ばれた [Chrétien 1995]。1993年2月21日にキガリで起きたPSD指導者ガタバジ暗殺事件に関与 [Reyntjens 1995, 61]。

Zigiranyirazo Protais

通称「ミスターZ」。1938年、ギセニイ県ギチエ (Giciye) コミューン生まれ。ギチエは、隣接するカラゴ (Karago) コミューンとともに、ブシル (Bushiru) を成し、これはハビヤリマナ前大統領とその妻アガトの出生地でもある。ジギラニラゾはアガトの兄弟で、1974～89年の間ルヘンゲリ州の知事を務める。1994年4月当時、ギチエ・コミューンに居住するビジネスマンだった [ICTR]。ゴリラ密輸とダイアン・フォッシー殺害に関わる [Gordon 1995]。ビジネスマンとしてカナダに渡るが、そこでルワンダ人を脅迫したとして、1993年9月に国外追放処

分を受ける。RTLМの大株主。

(注1) アフリカ政治研究においてしばしば指摘される、国家の新家産制的性格 (Neo-patrimonialism) に関する中心的論点はここにある。代表的な議論として、Médard (1982) を参照。

(注2) この事実は、ルワンダのジェノサイドを理解するために、政治エリートの研究だけで十分だということの意味しない。例えば、なぜ大量の民間人が殺戮に参加したのかという問題を、政治エリートに関する研究だけから解きえないことは明白である。こうした問題意識からの接近として、Strauss (2006)、武内 (2003; 2007) などがある。

(注3) MRND (Mouvement Révolutionnaire National pour le Développement: 開発国民革命運動) は、ハビヤリマナが創設した政党で、1978年の憲法によりルワンダで唯一の政党と定められた。1991年4月の党大会で党名を民主主義・開発国民共和運動 (Mouvement Républicain National pour la Démocratie et le Développement: MRNDD) に変更したが、煩雑さを避けるため、本稿ではMRNDで統一する。1991年6月の憲法改正によって、ルワンダは複数政党制を導入するが、RPFが内戦で勝利するまで、MRNDは政権与党の地位にあった。

(注4) 1991年1月にルワンダ北東部で起こった虐殺事件。牧畜に依存して伝統的な生活をおくるトゥチの集団バゴグウェが、地方行政幹部の扇動などにより多数虐殺された。

文献リスト

<日本語文献>

武内進一 2003. 「ブタレの虐殺——ルワンダのジェノサイドと『普通の人々』——」武内進一編『国家・暴力・政治——アジア・アフリカの紛争をめぐる——』研究双書No. 534 アジア経済研究所 301-336.

—— 2007. 「ルワンダのジェノサイドとハビヤリマナ体制」佐藤章編所収 (近刊).

<英語文献>

- AR (African Rights) 1995. *Rwanda : Death, Despair and Defiance* (revised edition). London.
- Clapham, Christopher ed. 1982. *Private Patronage and Public Power : Political Clientelism in the Modern State*. London : Frances Pinter.
- Dorsey, Learthen 1994. *Historical Dictionary of Rwanda*. Metuchen : The Scarecrow Press.
- Gordon, Nick 1995. *Murder in the Mist : Who Killed Diane Fossey*. London : Hodder & Stoughton.
- HRW (Human Rights Watch) 1999. *Leave None to Tell the Story : Genocide in Rwanda*. New York.
- Médard, Jean-François 1982. "The Underdeveloped State in Tropical Africa : Political Clientelism or Neo-Patrimonialism." In *Private Patronage and Public Power : Political Clientelism in the Modern State*. ed. Christopher Clapham, 162-192. London : Frances Pinter.
- Melvern, Linda 2004. *Conspiracy to Murder : The Rwandan Genocide*. London : Verso.
- Prunier, Gérard 1995. *The Rwanda Crisis : History of a Genocide, 1959-1994*. London : Hurst.
- Straus, Scott 2006. *The Order of Genocide : Race, Power, and War in Rwanda*. Ithaca : Cornell University Press.

<フランス語文献>

- Chrétien, Jean-Pierre (dir.) 1995. *Rwanda : Les médias du génocide*. Paris : Karthala.
- Guichaoua, André (dir.) 1995. *Les crises politiques au Burundi et au Rwanda(1993-1994)*. Paris : Karthala.
- Munyarugerero, François-Xavier 2003. *Reseaux, pouvoirs, oppositions : La compétition politique au Rwanda*. Paris : L'Harmattan.
- Reyntjens, Filip 1985. *Pouvoir et droit au Rwanda ; Droit public et évolution politique, 1916-1973*. Tervuren : Musée Royal de l'Afrique Centrale.
- 1995. *Rwanda : Trois jours qui ont fait basculer l'histoire*. Bruxelles : Institut Anricain-CEDAF, No. 16.

<インターネット>

- ICTR (International Criminal Tribunal for Rwanda)
[公判資料] <http://65.18.216.88/> (2006年10月アクセス).

(アジア経済研究所地域研究センター, 2006年10月18日受付, 2007年6月4日レフェリーの審査を経て掲載決定)